藤沢市
藤澤浮世絵館
FUJISAWA UKIYO-E MUSEUM

浮世絵館だより

2020年
2月
Vol.11

もくじ

展示紹介
最強！？相模武士の物語と浮世絵 ……P1
大庭御厨と鎌倉党 ……P2
扇谷上杉氏の拠点 藤沢の大庭城について ……P3
相模武士たちの浮世絵／浮世絵こぼれ話 ……P4，P5
ＯＮＩＫＡＧＥ学芸員のページ／うきよ場なれ／編集後記 ……P6

最強!? 相模武士の物語と浮世絵

会期　2020年2月22日（土）～4月12日（日）

南上空から見た大庭城跡（1990年12月撮影）

歌川国芳「石橋山伏木隠 大場三郎景親」（部分）

「最強！？相模武士の物語と浮世絵」の展示では、藤沢と平安時代後期から鎌倉時代の武士たちの物語と浮世絵の関わりを紹介します。

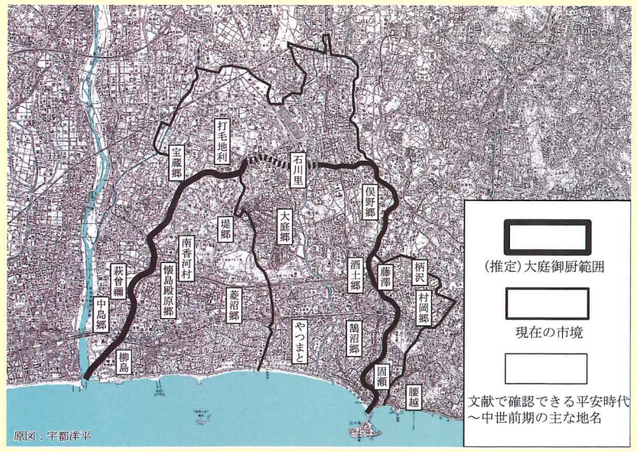
江戸時代の歌舞伎には、平安時代から戦国時代までの歴史の中で活躍した武将が数多く登場し、好まれました。浮世絵にも国芳を代表とする絵師たちがダイナミックな武者絵を数多く描き、人気を博しました。伝承的ですが、藤沢や鎌倉などの周辺の地名には、浮世絵に描かれた武将とつながる地名が数多く残されています。今回、紹介する浮世絵のひとつに描かれている大庭景親（おおばかげちか）は、歌舞伎の暫（しばらく）で知られた鎌倉権五郎の後裔（こうえい）で、藤沢の地名である「大庭」を名乗ります。このように、郷土にのこされた歴史が意外にも浮世絵の中に垣間見ることができるのです。（※表紙の作品では大場三郎景親と記載）

藤沢には、江の島や藤沢宿の浮世絵以外にも、地域の歴史に関わりが深い浮世絵、資料が豊富にあることをお伝えできれば幸いです。

大庭御厨と鎌倉党

永保３年(1083)、東北地方で清原氏という一族の内紛に端を発した後三年の役が起こります。当初この合戦は一族の家督相続を中心としたものでしたが、そこに奥州の権益を狙う源義家が介入することで争いが複雑化していきます。この時、源義家は相模・武蔵両国の武士団を率いて戦いますが、その軍勢の中に若干16歳の青年武士がいました。その武士こそ鎌倉権五郎景政(景正)です。鎌倉景政は苗字のとおり、鎌倉を中心として勢力を伸ばしていた武士団の一人で、一族を「鎌倉党」と言います。後三年の役で活躍した鎌倉景政は、永久４年(1116)に先祖より受け継いだ土地を開墾し、伊勢神宮に寄進します。大庭御厨の誕生です。鎌倉景政は伊勢神宮を後ろ盾にして現地支配をおこなうことを考えたのでしょう。伊勢神宮の記録である『天養記』には、大庭御厨の範囲が記されています。それを見ると、東は俣野川(境川)、西は神郷(寒川神社領)、南は海、北は大牧崎(亀井神社付近か)であったことが分かります。これは現在の茅ヶ崎市の大部分と藤沢市の中部以南を併せた範囲です。

橘守国「絵本写宝袋」抜粋「鎌倉権五郎景正」



中世前期の地名と大庭御厨推定範囲

大庭御厨の現地支配は、鎌倉景政の後は子息の景継に引き継がれます。ところが、景継の後は同じ鎌倉党の一員ですが、別系統の大庭景宗という人物が大庭御厨を支配していたことが当時の記録からわかっています。おそらく一族内での力関係が変わり、鎌倉党の棟梁は景政系統から景宗系統へ移ったと考えられます。

この大庭景宗には複数の子息がいましたが、跡を継いだのは三男の大庭景親でした。大庭景親は源氏の没落後、平清盛から信認され相模国の支配を任されます。ところが、治承４年(1180)に起こった源平合戦として有名な治承・寿永の乱で、大庭景親は失脚し、兄の景能(景義)が鎌倉党を率いることになります。鎌倉幕府が成立した当初、鎌倉党は幕府内で大きな影響力を持っていましたが、権力の掌握を図る北条氏との駆け引きに敗れ、鎌倉党の中心的な所領であった大庭御厨も建暦３年(1213)に起きた和田合戦で没収されてしまいます。ただし、一族が滅亡したわけではなく、長尾氏などは後に上杉氏の家臣として活躍し、後には戦国大名として有名な長尾景虎（上杉謙信）を輩出します。

一方、大庭御厨は和田合戦の後に北条氏に加担した武士たちに恩賞として分与されますが、鎌倉時代・室町時代をとおして詳しいことは分かっていません。室町時代の終わりには御厨は有名無実化してしまったと思われます。

扇谷上杉氏の拠点 藤沢の大庭城について

現在の大庭城跡である大庭城址公園へのアクセス

大庭城は平安時代後期に活躍した大庭景親の館を築城の名手である太田道灌が城として改修したが、伊勢宗瑞（俗称：北条早雲）により落城したという地元伝承があります。江戸時代の後期に書かれた『新編相模国風土記稿』という地誌にも同様のことが書かれており、古くから地元でこのように語り継がれていたことがわかります。しかし大庭城が使われていた室町時代の記録をみると、大庭景親の館と大庭城は別のところにあることがはっきりと書かれています。なお、大庭城という名称は『風土記稿』に登場するのが初めてです。当時は城の事を「要害」と呼んでいたので、大庭城も「大庭要害」と呼ばれていた可能性があります。

歌川国芳「石橋山伏木隠 大場三郎景親」

大庭城については、あまり多くの記録が残っていません。扇谷上杉氏という一族が大庭城を築城し、永正９年(1512)に伊勢宗瑞により落城したということぐらいです。扇谷上杉氏は、室町時代の関東の名門である上杉氏の一派であり、代々相模国の守護（相模国の長官）であったことが知られています。扇谷上杉氏は相模国と武蔵国に主な領地を持っており、当主は武蔵国河越城を主な居城としていました。そして大庭城は歴代当主の扇谷上杉氏当主と血縁関係の深い上杉朝昌という人物が守備していたことが記録からわかっています。

このようなことから、大庭城は扇谷上杉氏の相模国支配の最重要拠点の一つとして機能していた可能性があると近年の研究では指摘されています。ただし永正９年に落城したのち、伊勢氏はすぐに玉縄城（鎌倉市玉縄）を築いて相模国東側の重要拠点としていることから、大庭城は再利用されることなく廃城したものと思われます。

楊洲周延「雪月花 武蔵 高田花」の太田道灌

昭和40年代、湘南大庭地区で土地区画整理事業がおこなわれる中で、大庭城を削平するか保存するかで議論が出てきました。そのため城の様子を把握するため、発掘調査がおこなわれることになりました。調査の結果、地面の下には堀や建物跡などの遺構や、常滑窯製品・瀬戸窯製品や炭化米などの遺物が確認されました。このような発掘調査の成果から、北側の一部は削平されたものの、大庭城の大半は保存されることになり、現在では大庭城址公園として多くの人々に親しまれる憩いの場として活用されています。

近年、大庭城を学術的に評価する動きが高まっており、研究者たちから大庭城は扇谷上杉氏時代の城の姿を残した数少ない城館という指摘がされています。将来的に、大庭城は藤沢市を代表する文化遺産になる可能性を秘めています。

相模武士たちの浮世絵

勝川春亭「石橋山合戦」（部分）

相模武士たちが歴史の脚光を浴びるのは、源頼朝の伊豆挙兵に端を発する、石橋山の戦い（1180年）です。勝川春亭が描く「石橋山合戦」（図１）（寛政10年～文政３年1798-1820）は、頼朝軍と大庭景親ら平家方の戦闘を細かに描いています。画中には、中央に大庭景親と俣野景久、左手に同志の海老名源八（季員）、梶原景時が描かれ、右手に頼朝軍の佐々木高綱が、いずれも見事な武者ぶりで描かれています。石橋山の戦いのエピソードのひとつに「頼朝の伏木隠れ」があります。頼朝が石橋山の合戦に敗れた後、山中の伏木に隠れているのを、捜索していた梶原景時が見つけましたが、味方には「だれもいない」と告げやりすごし、頼朝を助けたというもので、浮世絵でもよく取り上げられる画題です。

勝川春亭「石橋山合戦」（図１）

本号の表紙にも掲載した、歌川国芳の「石橋山伏木隠　大場三郎景親」（天保14年～弘化４年1843-1847）では、平家方の大将格、大庭景親が立つ下に「源頼朝卿」らが潜んでいるさまを描いています。

また、見立て（パロディー）絵としては、石橋山の戦いを美人画に仕立てた、国芳の「時世石ばし山　頼朝ふし木かくれの図」（文化年間1804～07）（図２）があります。画中、左手に梶原景時と大庭景親。二人おいて「ろうとう（郎党）なかを（長尾）」。長尾定景は大庭景親の従兄弟にあたる武将です。右端にもつれ合っている二人は「さなだまたの」と記されていて、真田与一義忠と俣野五郎景久の「組討ち」を見立てています。

歌川国芳「時世石ばし山　頼朝ふし木かくれの図」（図２）

（部分）
真田与一義忠と俣野五郎景久の組討ちの見立て

歌川芳艶（図３）
「武勇高名組討撰　真田与一義忠／股野五郎景久」

その組討ちを描いたのが歌川芳艶「武勇高名組討撰　真田与一義忠／股野五郎景久」（安政２年1855）（図３）です。組討ちとは、戦場で敵将を倒し組み伏せてその首を取ることです。戦いは一瞬、与一の有利に働きましたが、俣野の加勢にかけつけた長尾新五と弟の新六の手により与一は討たれてしまいました。

武将たちの歴史を語る「武者絵」は、浮世絵のジャンルのひとつとして人気を博しました。嘉永６年（1853）刊の『当代全盛高名付』の浮世絵の箇所に「豊国にかほ（似顔）、国芳むしや（武者）、広重めいしよ（名所）」と紹介されていることからも窺えるように、武者絵といえば国芳とその一門の作品が他を凌いでいたようです。

浮世絵こぼれ話 08

歌川国貞「暫　十八番之内　壱　鎌倉権五郎景政」

暫（しばらく）は、江戸時代、歌舞伎役者市川団十郎が、お家芸として選定した歌舞伎十八番のひとつ。

鎌倉権五郎景政は、鎌倉党の始祖といわれ、現在の藤沢市域にあたる大庭御厨を開墾した、藤沢にもゆかりのある人物として知られています。また、鎌倉権五郎景政というと、おもに神奈川県東部に点在する御霊神社の祭神として祀られていることで、その名を知る人も多いのではないでしょうか？　神奈川県神社庁所轄の神社のうち、「御霊神社」の名称で登録されている13社中８社が景政を祭神として祀っています。しかし、全国的にみると「御霊神社」というと、その祭神は景政ではありません。一般的に、御霊神社とは、恨みをもって亡くなり怨霊となった人物を祀ることで祟りを鎮めようという御霊信仰に基づいて建立されたものです。その一方、中世以降の御霊信仰の特徴として、鎌倉権五郎景政や、佐倉宗五郎など、生前に力強い活躍で個性を発揮した人物が、守護神としての存在を期待され、子孫などによって祀られるようになりました。

鎌倉武士団にゆかりのあるこの周辺地域では、京の周辺で恐れられていた怨霊の御霊よりも、地元に貢献した守護神としての御霊を祀る傾向が多くみられたと考えられます。

ONIKAGE学芸員のページ

浮世絵を伝えること11

「～おお！カミよ、我を救い給え！！～」

寒さ厳しく、春が待たれるこの頃です。紙漉きは、かつては農家などの冬の副業でしたので、往時の水の冷たさを偲びつつ、今日は「浮世絵の紙」についてお話し致しやしょう。

紙の日本への伝来は、日本書紀に“高句麗から渡来した曇徴と言うお坊さんが墨や絵の具とともに紙の漉き方を伝えた”と言う記録があります。これが西暦610年頃ですから、紙には長い歴史がございますねぇ。今でも伝統の技法による素晴らしい紙が残されており、日本産楮を原料とした「石州半紙」（島根県浜田市）、「本美濃紙」（岐阜県美濃市）、「細川紙」（埼玉県小川町、東秩父村）は、「日本の手漉和紙技術」として無形文化遺産に指定されております。

浮世絵の紙の原料は、楮が主体で、ついで三椏、雁皮です。さらに日本で発達した「流し漉き」技法で、トロロアオイやノリウツギから採取した粘材を入れることで長い繊維が絡んで丈夫になりました。それが、摺る時に面が平滑で、かつ、よく絵の具を吸い、何度も馬簾で擦っても破けない強い性質となって、浮世絵の紙として活かされているんでございますよ！　江戸時代、浮世絵の最上の紙と言えば「奉書」で、摺り物や特上錦絵はこれでした。よく流通した紙には奉書の一種の「政」があり、どちらも同じ大きさで、この２分の１が浮世絵の「大判」と申します。現在のB4版くらいです。その半分が「中判」、そのまた半分が「小判」や「四丁張」などとなっていきます。他にも、「短冊形」や「色紙形」など、形・寸法は多種多様でございます。

さあ、摺り作業ですが、摺る前には「礬水引き」という、膠と明礬を混ぜた滲み止めを塗ります。そして摺る前には、紙に湿り気を与えて時間を置くのも、浮世絵摺りの特徴でございます。こうすることで、その水分に引かれて紙の繊維の奥まで絵具が入ります。多色摺りの場合、一定の湿り気を維持するのは摺り職人の腕で、これが狂うと紙の大きさが変わり、摺った画がきれいに重ならなくなってしまうんでございます。

そして、最後に「化粧裁ち」で、見当に紙を合わせるため整えます。フ～。大変でございましょう。

絵師、彫り師、摺り師以外にも、浮世絵には、こんな職人さんが関わっておりますよ。神よ！紙を護りたまえ！！　では、後ろ髪をひかれつつ・・・

まったね～！！

編集後記

江戸時代後期に、庶民の間では、今でいう歴史ブームのような流行りがあったようです。歴史話から生まれた歌舞伎の外題が多数あるように、浮世絵にも歴史の事象が多く描かれました。中でも歌川国芳が嚆矢とされる武者絵は、よく好まれ、今の私たちが知らない武将、戦場、故事が描かれており、江戸庶民の尽きない興味の広がりに応えたものと思います。

藤沢市の城址である大庭城は、鎌倉時代の武将、鎌倉権五郎から大庭景親へとつながる歴史をみることができる場所です。

江戸時代に好まれた武将たちの雄姿を描いた浮世絵を通じて、藤沢市の大庭城址など歴史にも興味をもっていただければ幸いです。

編集・発行：藤沢市藤澤浮世絵館

【住所】〒251-0041 神奈川県藤沢市辻堂神台２丁目２番２号ココテラス湘南７階

【電話】0466-33-0111　【FAX】0466-30-1817

【開館時間】10:00～19:00（入館は18:30まで）

【休館日】月曜日（祝日、振替休日の場合は翌平日）

※その他、展示替えのために休館日がございます

【ＨＰ】 藤沢市藤澤浮世絵館 で検索

facebook：藤澤浮世絵館 公式アカウント

⇦このマークが目印です。「いいね！」お願いします。

キュンと藤沢 するまち。